

法／医療現場における質的研究のあり方と TEM の位置づけ

TEM and Qualitative Methodology on Inquiry of Human experience

サトウタツヤ¹・福田茉莉²・木戸彩恵³・安田裕子²

SATO, Tatsuya, Mari Fukuda, Ayae Kido and Yuko Yasuda

立命館大学／文学部¹・衣笠総合研究機構²・立命館グローバルイノベーション機構³

Ritsumeikan University

Key words: 質的研究, TEM (複線径路等至性モデル), 法／医療現場

目的

アメリカ心理学会が2012年に出版した『心理学における研究方法』というハンドブック(全3巻、A4で2500頁ほど)の巻頭論文は「質的研究における認識論的基礎の展望」という論文だった(Willig, 2012)。

質的研究への期待は高まっているものの、様々な方法について、その特徴や認識論についての整理がなされているとは言えず、理論的整理を行う必要がある。

方法

「経験」を中心に、「実存」と「現象」で一つの次元を構成し、それに直交する形で「構造・機能」と「過程・発生」からなる次元を配置した。このような二軸の平面上に、様々な方法がどのように位置づくのかを議論し、仮説的に配置した。

結果

二軸が構成する平面で作られる4つの象限は、「文脈・意味を重視」「ことばの『意義』を重視」「理論構築を重視」「記述を重視」という象限として意味づけることが可能であった。現在用いることができる様々な方法を4つの象限に仮置きしてみたのが下図である。

考察

質的研究の対象を「経験」だとすれば、個別の経験の実存性を追究するか、経験の個別性をこえた現象性を追究するかで大きくアプローチが分かれる。これまでの質的研究は現象学に頼っていた面があったが、それは質的研究が意識しているかどうかにかかわらず、普遍性を求めていたことを示唆する。また、GTA やエスノグラフィが質的研究の主流となっていることは、過程・発生を明らかにする志向よりは構造・機能を明らかにする志向の方が強かったと理解すべきである。

このように整理すると TEM (安田・サトウ, 2012) は実存的志向性をもち過程と発生を理解しようとする新しいタイプの質的研究法として位置づけられる。

参考文献

- Willig, C. (2012) Perspectives on the Epistemological Bases for Qualitative Research.
Cooper, H. Chief Editor "APA Handbook of Research Methods in Psychology" APA: Washington.
安田裕子・サトウタツヤ (編). (2012). TEM でわかる人生の径路—質的研究の新展開. 誠信書房.

